[redacted]

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 58　No. 1　2006

主幹　佐野 正之

巻頭言

山登りかガーデニングか

横浜国立大学名誉教授●佐野 正之

「山登りかガーデニングか」といっても，趣味の話ではない。英語授業に臨む教師の姿勢として，どちらがよりふさわしいかということである。山登りにたとえるとすれば，教師はまず，登る山についての情報を集め，最も適切なルートを設定しなければならない。すなわち，到達目標の設定とカリキュラムの作成が必要となる。登り始めたら，一人ひとりの様子に目を配りながら，生徒を励まし，一歩一歩頂上を目指して前進する。途中，霧が出たり生徒がバテた場合は，登るルートやペースを調整しなければならない。すなわち，形成的な評価で進歩を確認しながら進めなければならないのである。だが，リーダーである教師に最も求められるものは，困難に遭遇しても決して諦めることなく，全員を頂上に導く意志と体力である。そして，ついに頂上に到着したときには，生徒と喜びを共有する仲間意識だろう。

一方，ガーデニングにたとえれば，教師の仕事はまず，人間関係という土地を耕さなければならない。不信の石が混じっている土地では，何を植えても成長は望めない。だから，教室の雰囲気作りが最初の仕事になる。次は，植える種の種類を見極め，最も美しく開花するように，植え付けや水やりや除草に気を配らなければならない。英語授業で言えば，生徒の能力や個性を考えて，導入や練習や言語活動の工夫をしなければならないということになる。だが，ガーデニングで最も大切なことは，成果をあせらず，花の成長を楽しむ心のゆとりだろう。すなわち，教師自身がガーデニングを楽しむことが必要なのである。

さて，皆さんはどちらのタイプが好みだろうか。実際の授業では，生徒を励まし，目標に向かわせる指導は必要である。また，生徒の可能性を信じ，成長過程を楽しむ気持ちのゆとりも必要である。だから，どちらが正しいとは言えないだろう。むしろ，山登りにしてもガーデニングにしても，そのこと自体を生徒とともに楽しむ教師の気持ちこそ成功の秘密かもしれない。

〈19年度新刊 英語Ⅰ〉

Revised Edition ENGLISH NOW Ⅰ

〈基礎・基本に徹した教科書〉

京都産業大学名誉教授　石井 丈夫

かつてNOWの教科書を英語の専門家でない知人に送付したことがあります。お礼のことばの中に「この教科書には愛がありますね」という一言がありました。今回の改訂版の作成にあたっても，私たちは内容の選択と全体のバランスの点からも，この気持ちを忘れずに作成したつもりです。

題材一覧表を見ていただければ，言語，文化，福祉，スポーツ，環境問題，平和といったテーマがバランスよく含まれていることがお分かりいただけると思います。

ここでは以下の４つの課について，題材の特長などを説明することにします。

Lesson 3　You Must Try My Cookies.

ここではことばのおもしろさ，意味の思いこみ，言語表現の違いなどを取り上げました。英語と日本語だけでなく，どの言語についても同様のことが言えるのではないでしょうか。単語や構文の点からごく簡単な対話にしました。

自分が作ったものを自分でほめるのは日本文化には見られないことでしょう。逆に「何もございませんが」とへりくだるのが普通です。外国の人にとっては奇異に聞こえるということも取り入れました。また，must は「ねばならない・ちがいない」と覚え込んでいる人には“You must try them.”という表現はとまどうことでしょう。

言語表現の違いについて，例を挙げましょう。以前テレビのコマーシャルで「コカコーラを飲もうよ！」が見られましたが，アメリカのテレビや広告では“Let’s Drink Coca-Cola.”ではなく“Drink Coca-Cola!”になっているように，命令形の使い方が異なるのです。料理のレシピにも命令形が使われるのが普通です。こんなことも生徒にはおもしろいかもしれません。

Lesson 7　Sannai Maruyama

自国の文化について英語で発信することをめざして三内丸山遺跡を取り上げました。日本最大の縄文集落であり，日本独自の新石器文化であることを示すこの遺跡がふさわしいと考えたからです。

教科書では，見学に訪れた外国人にツアーガイドが英語で遺跡を説明するという設定になっていますが，遺跡のホームページを見れば分かるように，実際に英語のボランティアガイドの説明を受けることもできるようです。

また，文章全体の構成にも注意してもらいたいと思います。外国人にとっては，日本という異文化の中にある縄文時代の遺跡はかなり理解が難しいことでしょう。そこで，最初に遺跡の全体的説明をし，次にその特徴を３つのキーワードを用いて解説しています。このような説明の仕方は，日本人を対象に行う場合も，分かりやすく効果的であると思われます。生徒にも学んでほしいものです。

なお，このような構成は第９課でも用いられています。

Lesson 10　*Ondol* and *Kimchi*

隣国韓国の伝統的な食・住について，オンドルとキムチを取り上げています。両者について説明するだけではなく，この伝統が徐々に薄れつつあることについても触れています。

特に大都市の集合住宅では，構造上，オンドルを設置することができず，普通の暖房装置が使われていることや，キムチを作るのには手間がかかることから，店でできあいのものを買う人が増えているということも述べられています。

我が国においても伝統的なものを自分で作らなくなってきていることに気づかせたいものです。餅や漬物などがよい例でしょうか。

Lesson 11　Dreams

長い間戦争が続いているために，アフガニスタンを逃れ，イランの難民キャンプで過ごす少女ザグネについての話を通して，平和の問題について考えさせたくて，この改訂版で取り上げました。

平成19年度用 開隆堂高校英語教科書・内容のご案内

実話に基づく医師兼写真家の山本敏晴さんの著書『彼女の夢見たアフガニスタン』の中で，ザグネとの奇跡的な再会が述べられています。本文の写真はすべて山本敏晴さんの撮影です。

題材一覧（B5判・120ページ／基本語約 1,320 語＋新出語約 850 語〈固有名詞は除く〉）

題　　名	内　　容
Lesson 1 Welcome to Japan!	カナダからやってきた留学生のジュディを，ホストファミリーとなるみどりが空港で出迎える。
Lesson 2 I’m Judy Smith.	ジュディが教室で自己紹介をする。出身地トロントや好きなものについて述べた後で，好きな歌手についての質問に答える。
Let’s Communicate! ① 健太，カナダへ	「カナダへ留学」という設定で，機内放送，入国手続きなどを疑似体験する。
Lesson 3 You Must Try My Cookies.	ジュディは友だちになった理恵の家庭に夕食に招かれる。理恵のお母さんとジュディは，言語文化の相違から生じる理解しづらい場面に遭遇し，戸惑う。
Lesson 4 Different Colors in Different Cultures	色に対する文化的相違を日常的な物を通して理解する。例えば，太陽と月の色，虹の色の数，各国のポストの色などである。文化が異なると色のとらえ方が異なる場合があることを理解する。
Let’s Communicate! ② 家族紹介・道案内	家族紹介，道案内の基本表現をリスニング，対話活動などを通して学ぶ。
Lesson 5 Something New in Japan	アメリカからの留学生スーザン，モンゴルからの留学生バットが日本に来て驚いたことについて発表する。そこから，改めて自国の文化について考えるきっかけとなることを期待する。
READING ① Whose Wedding?	結婚をめぐってくり広げられる若い男女のコミカルなストーリー。ある程度まとまった分量の英文を，わからない語は前後関係から推測し，あまり辞典に頼らずに最初から最後まで読み通すことがねらい。
Lesson 6 Wheelchair Travel in the U.S.A.	車いすでも海外旅行はできる。「為せば成る」の精神で，それを照明してみせた痛快な仲間たちのアメリカ旅行記。
Let’s Communicate! ③ スポーツ観戦	野球場での場内放送や売店での買い物などの表現を学ぶ。
Lesson 7 Sannai Maruyama	日本最大の縄文集落として注目されている青森県の三内丸山遺跡で，ツアー・ガイドがこの遺跡の意義について説明する。
Lesson 8 Swing Your Arms, Hitomi!	アムステルダム・オリンピック（1928年）の800メートル走で銀メダルを獲得した人見絹枝の苦闘のエピソード。
Let’s Communicate! ④ 学校生活	自分の学校や日本文化（折り紙）についてのプレゼンテーションを行う。
Lesson 9 Garbage, Garbage Everywhere!	深刻な環境問題の１つであるゴミ問題をとりあげ，私たち一人ひとりにできることは何かを考える。
Lesson 10 *Ondol* and *Kimchi*	韓国の文化を代表する「オンドル」と「キムチ」を通して，厳しい冬の寒さをしのぐ韓国の人々の伝統的な生活様式を知る。
Let’s Communicate! ⑤ 病院に行く	電話での基本表現，症状や体調の説明のしかたをロールプレイで学ぶ。
Lesson 11 Dreams	現在も戦闘の続くアフガニスタンの難民の少女ザグネが夢を語る。
READING ② Fly Away Home	14歳の少女エイミーが偶然見つけたグース（カナダ・ガン）の卵がふ化して，16羽のひなはすくすく育つ。飛ぶことを教え，越冬させる感動物語。

〈19年度新刊 オーラル・コミュニケーションⅠ〉

ORAL COMMUNICATION Revised EXPRESSWAYS Ⅰ Standard Edition

〈中級向け〉

浜松大学教授　三井 敏正

この教科書はオーラル・コミュニケーションⅠの教科書として，中学校における英語の基礎に立ち，比較的平易で身近な内容を選び，英語学習への意欲を失うことなく，高校生としての興味と関心を呼び起こし，生き生きと楽しく実用的な英語が学習できるように編集されている。

それぞれの課のトピックは日本，それも高校生にとって，自分の生活に密着した場面が多く取り入れられている。高校生がふだん経験しているような場面が英語で生き生きと再生され，そこに，主人公である日本人の高校生の亜紀と，アメリカから日本に留学しているトムが中心となり話が進んでいく。日本の習慣や文化に興味をもったトムに亜紀が英語で説明したりする場面など，英語での異文化間のコミュニケーションが多くの場面で行われている。

トピックは，例えば学校での場面（Introductions & Greetings, Asking Permission, A School Outing），高校生の一日や週末の過ごし方（My Daily Schedule, Weekend Plans），家庭（My Home），日本独特の物がいろいろ登場するスーパーでの買い物（Shopping for Sukiyaki），誕生日や趣味，将来の夢などをお互いに聞き合う（My Horoscope, Hobbies, Sports, Talking about the Future），また，外食や病気の時，電車の乗り方など社会生活の話題（Fast Food, Health Problems, Taking a Train, At a Sushi Restaurant），また今日的な話題であるVolunteer Activities などもあり，身近な話題で，しかもたいへんヴァラエティーに富んだものとなっている。

本文の構成はまず，中心的なダイアログから入っている。それぞれの課のダイアログには，核となる重要表現があり，その重要表現を中心として練習しやすく覚えやすいように，分量は4～5行と抑えてある。

ダイアログの下には **Info** という解説のコーナーがあり，その課の表現についての，意味合いや，どういう状況で使われるかなどを説明し，生徒の理解度を深める役割を果たしている。例えば，Lesson 14 の **Info** の一部は次のようになっている。「『電車に乗る（利用する）』は，take を使い，take a train となります。『乗る［降りる］』という動作なら，get on［off］となります」。

そして，ダイアログの理解を確かめるための聞いて答える形式の **Comprehension** が続き，さらにトピックと関連する内容や発展させた内容を耳で聞いて答える形式の **Listening Practice**，ペア・ワークが中心となっている **Speaking Practice**，そして，その課で学んできたことを総合的に練習し，自分の考えをまとめて，グループ・ワークや発表を通じてコミュニケーション能力の向上を目指すコーナーとして **Communication Goal** を設けている。

また，19年度版では，「キーワードをキャッチしよう」「音のつながりや変化に慣れよう」「弱くなる音に慣れよう」など英語を聞くための音声上の留意点を分かりやすく，例文とともに練習できるようにまとめた **Listening Points** や，京都を代表する名所を英語で聞いたり，実際にガイドになって **Hints** を活用して清水寺の説明を英語にし，発表する **Welcome to Kyoto!**，魚の英語名についての問答をペア・ワークで行ったり，ヒントを参考に魚の説明を英語にして発表する **Welcome to Our Aquarium!** のページなどが設けられている。

巻頭には，教室で先生に積極的に質問できるように，**Classroom English** のコーナーを設け，実際に教室で使える表現を豊富に挙げている。最初の授業で練習し，活用してもらいたいコーナーである。

題材一覧（B5判・96ページ）

題　　名	内　　容
1 Introductions & Greetings	亜紀がトムにクラスメートを紹介する。（挨拶や紹介のしかた）
2 Asking Permission	トムが亜紀にものを借りる。（許可を求める・感謝の気持ちを表す表現）
3 Suggestions	亜紀がトムに，皆と一緒に水族館に行こうと誘う。（提案を表す表現）
4 Questions	トムが亜紀に質問する。（相手から知りたい情報を聞き出す質問の表現）
5 Telling Time	放課後，トムが時刻を亜紀に聞く。（時や日付，予定に関する表現）
Listening Points	リスニングのための留意点をまとめ，例文とともに提示したページ。
6 My Daily Schedule	亜紀がトムに一日のスケジュールを聞く。（日常の習慣についての聞き方）
7 Weekend Plans	トムが亜紀に週末の過ごし方について聞く。（週末の予定の聞き方）
8 My Horoscope	トムと亜紀が誕生日や星座について話し合う。（誕生日と星座の聞き方）
9 Hobbies	トムの趣味について亜紀が聞く。（趣味について話す言い方）
10 Fast Food	亜紀とトムがファーストフードの店で注文する。（注文に関する表現）
11 Directions	トムがホテルへの行き方を人に聞く。（目的地への行き方に関する表現）
12 Talking on the Phone	トムが亜紀の家に電話をかけると，亜紀のお母さんが電話に出る。（電話のやりとりや決まり文句の練習，電話による情報伝達のしかた）
13 Volunteer Activities	亜紀とトムがお互いのボランティア活動について話す。（ボランティア活動に関わる表現を学び，自分自身の考えを伝える練習）
14 Taking a Train	トムが代々木上原から地下鉄に乗ろうとして駅員に聞く。（電車の乗り降り，乗り換えの言い方，所要時間の聞き方・答え方）
Welcome to Kyoto!	総合的な言語活動の課。京都の寺社めぐりを行う設定で，英語で金閣寺等の説明を聞き，ヒントを参考に清水寺の説明を英語で作り，発表する。
15 Shopping for Sukiyaki	亜紀とトムがすき焼きの材料を買いにスーパーに行く。（品物の数量の表し方や日本的なものの説明方法）
16 Sports	亜紀がトムに好きなスポーツを聞く。（好きなスポーツの種類や比較）
17 Health Problems	トムの体の具合を亜紀が心配する。（体調を聞いたり，症状を答える表現）
18 My Home	亜紀がトムを自宅に招待し，和室の居間に通す。（接待や案内の表現）
19 Talking about the Future	トムと亜紀が将来なりたいものについて語る。（将来の夢や希望に関する表現）
Welcome to Our Aquarium!	総合的な言語活動の課。水族館内の設定で，英語の音声案内で魚の説明を聞く。これをもとに，グループで魚の説明を英語で作って発表。
20 At a Sushi Restaurant	亜紀のお父さんが亜紀とトムをすし屋に連れていく。（日本料理店での典型的な説明表現やものの位置の表し方，料理法の表現）
21 A School Outing	亜紀とトムが遠足の予定を確認する。（出発や集合の時刻，天候の表現）
22 E-mail to a Friend	亜紀がトムにパソコンの使い方を聞く。（パソコン関連の表現）

日本人学習者とオーラル・コミュニケーション（1）

—Listening in the Oral Communication Classroom—

明治大学教授　James C. House

Student motivation is highly significant for the successful learning of anything, but it is especially important when learning a foreign language, such as English. For example, listening to a foreign language is complex and demands a mixture of tactics and approaches that students rarely employ in other subjects. It not only involves intellectual application but also it requires great concentration, physical effort and flexibility of thinking. A high level of motivation is needed by both students and teachers.

There are two types of motivation; instrumental and integrative. In instrumental motivation students merely want to get a passing grade in a test or, at a higher level, want to acquire English to help them in their future career. Whereas with integrative motivation "learners may choose to learn a particular L2 because they are interested in the people and culture represented by the target language group." (Ellis, 1997, p.75)

I have taken some time in this article to talk about motivation because it is crucial to the teacher's approach in the classroom. In short, I would like teachers to concentrate on raising the students' motivation and their level of ability rather than concentrating on passing tests.

One way to do this is to make the listening tasks similar to the ones we do in real-life, such as following directions, listening to telephone messages, and understanding the news and weather. Nunan in *Listen In* (p.6) talks about the importance of listening strategies which are designed to improve the students' listening inside and outside the classroom.

He introduces important vocabulary and expressions that will be heard in the lesson in the "Warm up Task." This gives the learner some background in order to better comprehend the listening passages. This conforms to the "Top-down" process referred to by Jack Richards in *Listen For It* (p.xi) in which students can use their acquired knowledge to anticipate what is going to be said. Then comes the "Listening Task" itself which can be exploited in various ways by the teacher for pronunciation practice, extensive comprehension or detailed comprehension. This involves "Bottom-up" processing or the perceiving and interpreting of aural information contained in the message itself to arrive at meaning.

Listening is not a passive activity and in order to reinforce the listening students are asked to complete a communicative task such as discussing the topic of the listening in pairs or groups. Emphasis is also placed on the student completing self-study tasks after class to continue the process of learning until the next class. This gives continuity to the learning process, reaffirming what has been learned which, in turn, gives a basis for the next class.

In addition to Nunan's emphasis on "real-life" tasks it is important to provide our students with "comprehensible input." This central idea of language acquisition is known as the "Input Hypothesis" and was developed by Stephen Krashen. He defines comprehensible input as "understanding input that contains structures at our next 'stage' —— structures that are a bit beyond our current level of competence." (Krashen, 1985, p.2)

With motivation, comprehensible input, real-life tasks and reinforcement in place we need to add the important ingredient of fun. If somehow we can make the learning process enjoyable for our students by using topics and methods which make the class come alive then there is no limit to what the students can achieve.

References

・Ellis, Rod（1997）*Second Language Acquisition.* New York: Oxford University Press.

・Krashen, Stephen（1985）*The Input Hypothesis: Issues and Implications.* New York: Longman Press.

・Nunan, David（2003）*Listen In.* Boston: Thompson Heinle.

・Richards, Jack C., et al（1995）*Listen For It.* New York: Oxford University Press.

フォーラム

今なぜディベートの授業か
―三木高校SELHiの取り組みより―

兵庫県立三木高等学校教諭　神田 周久

1．はじめに

本校は平成16年度，文科省よりSELHi（スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール）の指定を受けている。本校はJR東海道本線から，北に約50キロ内陸部に入ったところに位置し，在校生に帰国子女はほとんどおらず，留学生もいない環境にある。英語使用環境が乏しい中で，本校では，普通科各学年に１クラスずつ国際コミュニケーションコースを設置している。コースの目標は，将来英語を使って，国際的な舞台で活躍できる人材や，たとえ地方にいても翻訳業や通訳ガイド業などを通じて国際的な仕事ができる人材の育成である。

2．シラバス作りと授業改善

コース独自の学校設定科目として各学年に２単位ずつ国際コミュニケーション（以下ICと呼ぶ）を置いている。ICの授業は，実技科目として位置づけ，授業内での活動（スピーチ，プレゼンテーション，ディベート）とジャーナル（１年生では身近な話題について英語で８～10回書かせたもの，２，３年では，主にディベートのテーマについて振り返るためのエッセイライティング）を評価の６割に組み込んでいる。

ICシラバスでは，１年生で１人２分間程度のパブリック・スピーチとグループでのプレゼンテーションができることを到達目標としている。２年生では，段階的指導によりディベートができることを，３年生では証拠を用いた本格的なディベートやディスカッションができることを目標としている。

ICの授業はすべてALTとのティームティーチングで，ほぼ100％英語を用いている。クラスを２分割あるいは４分割して，少人数授業で実施している。

3．４技能の統合的指導方法としてのディベート

３年生の授業では１つのトピックについて６時間を配当している。実際のディベートは３～４人ずつの６班編成で，３班ずつ２グループに分かれ，それぞれ肯定側，否定側，審判を１回ずつ経験するしくみになっている。生徒は肯定側，否定側の両方の立論を書き，最後には振り返り学習として，ジャーナルにエッセイ（150～200語程度）としてまとめることになる。６時間の授業の流れは以下のとおりである。

時数	授　業　内　容	技能
1	・トピックについての資料読解 ・立論草稿（宿題）	R，W
2	・リスニングによる資料の聴解 ・証拠の提示の仕方 ・立論練習・立論草稿提出	L，S
3	・反駁練習 ・グループ別準備練習 ・立論草稿返却	L，S
4	・ディベート第１対戦とその評価 ・立論最終原稿提出	L,S,W
5	・ディベート第２対戦とその評価 ・立論最終原稿提出 ・ジャーナルの宿題の提示	L,S,W
6	・ディベート第３対戦とその評価 ・立論最終原稿提出 ・ジャーナル提出	L,S,W

使用技能としてはリーディングが少ないようだが，生徒が立論の資料集めをする過程でインターネット等の英文資料閲覧や教師が与える補助資料の要点をまとめる等の作業を通じて，実際には読解量はかなり補える。教師側も真剣に資料を集めると，ファイルがすぐに１冊できあがってしまう。ディベートのフォーマットには，立論，第１反駁，第２反駁があり，授業１時間内での生徒１人当たりの発話時間は約３分間に達する。ディベートは勝ち負けがすぐ決まるので，生徒のやりとりの中に適度な競争心と緊張感が生まれる。生徒は，１つのテーマについて肯定・否定両面の立論をし，その反論を考え，相手の反論から新しい視点に気づき，学ぶことができる。３回のディベートが終わる頃には，テーマについて自分なりの考えを英文でまとめることができるようになっている。

生徒の発話する英文のAccuracy（正確さ）をどう確保するかという問題がある。特に３年生は受験を控えているので，受験との両立が大切である。原則は生徒が英語を使わなければならない場面に追い込み，Fluencyを確保することでAccuracyも自然に身につけさせることである。同時に，２回書かせた立論やジャーナルのエッセイを教師が添削指導することで側面から援助している。同じトピックで何回か書くうちに，生徒は英文を正しく書くことだけでなく，構成もしっかりしたものに仕上げることができるようになる。最後に，定期考査で，学期中に取り上げたテーマについて最低１つは，小論文形式で150語程度の英文を書かせて完成作品として評価している。

〈３年生１，２学期に議論したテーマ〉
- Everyone should learn English.
- Exercise is good for everyone.
- Both parents should work.
- We should continue to develop computer technology.
- Parents should take responsibility for what children watch on television.
- Men and women should be treated equally.
- We should continue to develop human cloning technology.

使用テキスト：*Which side are you on?*（成美堂）

4．発表の場の拡充

本校では，１年生は２学期末に全クラス全生徒がジャーナルに書いた内容からスピーチをするスピーチテストを授業中に実施している。さらにクラス代表を決め，３学期にクラス対抗スピーチコンテストを実施している。

ディベートの発表の場としては，12月に高校生英語フォーラムを実施し，その中でディベートコンテストを実施した。今年度は近畿圏の４校７チームで行われた。ここ２年続けて，SELHi校が決勝に残り，競い合った。今年度本校の授業で至らなかった点が他校との対戦で明らかになり，今後の取り組みへの良い刺激となっている。

5．今なぜディベートの授業か（まとめに）

① 英語を多用する環境の設定

従来の一斉授業では音読の時間はあっても１人当たりの英語の総発話回数及び時間は極めて少ない。ディベートの試合では，生徒は１人最低３回の発話回数と３分間程度の発話時間が用意されている。発話量の面でも１分間に60～80語程度発話しているので，書く活動よりも効率的である。しかも対戦であり，その発話を評価するので，適度な緊張感と競争意識が生まれる。

② 英語を使って「考える」力を身につける

従来の暗記一辺倒の英語教育では培えなかった英語を使ってものを考え，リサーチし，問題を解決していく力を身につけることができる。これは受験でも役に立つ学力であるだけではなく，大学や社会に入ってから本当に役に立つ学力ではないだろうか。「詰め込み」によって覚えたものはすぐに忘れるが，生徒が主体的に考え，コミュニケーションの場で用いた英語は後々まで生徒の自信とともに残るものだと考えている。

③「話す」ことから入ることのメリット

英語を使ってコミュニケーションする能力は英語を使ってコミュニケーションする活動を通じて身につけるのが一番早い。効果的なインプットとともに効果的なインテイクやアウトプットをすることが，さらにインプットをする意欲を高めさせる。スピーチやディベートなど授業の中で生徒が英語を使って自己表現する機会を増やすことで，生徒の中に「自ら英語を積極的に使おうとする」態度が芽生えてきたようだ。

コミュニケーション能力を高める多読教材の開発

――「読みトリくん」(CD-ROM)の活用――

入間地区中学校英語教育研究会研究推進委員長　**関口 睦**

入間地区中学校英語教育研究会(埼玉県)の研究推進委員会では，平成16年度から「読むこと」における理解の能力に焦点をあてた研究を進めてきました。この研究では理解の能力(読むこと)の定義を次のように定めています。

A．正確な読み取り

①英語を読んでその内容を正確に読み取る力

B．適切な読み取り

①英語を読んで書かれた内容から必要な情報を読み取る力

②英語を読んで書き手の意向や意図を理解する力

「読むこと」の指導は，英語を読んで「その内容を正確に読み取る力」や「書き手の意向や意図を理解する力」にばかり焦点が当てられて指導が展開されがちです。そのよい例が入試問題です。しかしながら，日常生活の中では，英語を読んで「書かれた内容から必要な情報を読み取る力」が要求される場合が少なくありません。

このため，本委員会では，CD-ROM教材「読みトリくん」を制作し，従来の読み取り教材だけでなく，旅行用のパンフレット類や広告などscanningの力をつけるための教材を盛り込みました。しかもできるだけ5～15分程度の短時間でできるものをファイル数にして80近く収めました。また，日本の伝統文化，昔話，ことわざ，説明文，シリーズものの物語など多様な教材を用意し，生徒の興味・関心に対応できるようにしてあります。「利用の手引き」に収められている生徒の自己評価表や目次にリンクが張られていて読みたい教材へ飛ぶようになっていますので，あらかじめ教材をハードディスクにコピーしておいて，生徒に好きな教材を自由に読ませてから，評価表に自己評価をパソコンで打ち込んでもらうことも可能です。

また，設問はWordで作成してありますので，先生方の都合で自由に書き換えたり，問題数を調節することも可能です。

この教材の活用法として考えられる方法は，①授業中に5～15分程度の時間で行う，②まとまった時間を取り，10種類程度用意したものの中から好きなものを自由に読ませる，③定期テストや小テストとしての利用，④用意されたプリントを生徒が自由に取っていく場所を学校に設け，期限を決めて提出させる，などが考えられます。私は④の方法で取り組みましたが，毎回半分近くの生徒が提出していました。生徒の感想としては，「文の中から重要な部分を読み取ることが大切な能力だと思いました」，「ゲームのようにできて日本の伝統文化を英語でどのように表現するかを楽しみながら学習できました」などこちらが期待していたような感想が多く，教材の質の高さを証明してくれたように思います。

なお，この教材は埼玉県の入間地区内の公立中学校に配布しましたが，まだ残部がありますのでご希望の場合には下記にお申し出下さい。

- **連絡先**：〒350-2213 埼玉県鶴ヶ島市脚折1868
  鶴ヶ島市立鶴ヶ島中学校　竹本 文男
  FAX 049-271-4289
- **定　価**：1,000円(送料が別途300円かかります)
- **申込方法**：郵便またはFAXで住所・氏名をご連絡の上，以下の口座に1,300円をお振込み下さい。
  埼玉りそな銀行坂戸支店 普通口座4859003
  口座名義「ヨミトリクン」

記事筆者(関口 睦)連絡先：
現在，日高市立教育センター(埼玉県日高市大字鹿山370-20）に勤務。

(「読みトリくん」より)

Tour 286 Full Day Tour　Dolphin Watcher

年　組　番

氏名

Port Stephens, Dolphin Watching, Aboriginal Heritage

$99.00

Tour 296　Port Stephens Overnight (3 Days)

$275.00

これは、オーストラリアのツアー・ガイドです。

①主に、何を見に行くツアーかな。

（　　）

②ツアー286の実施日は、何曜日？

（　　）

③ツアーの出発は、何時？

（　　）

④ツアーの終了時間は、何時？

（　　）

⑤ツアー286は99オーストラリアドルです。ツアー296は、275オーストラリアドルです。同じような内容のツアーですが、なぜこんなに値段が違うのかわかりますか。

本当に行きたいですね！　☆☆☆

Writing教育の展望

共愛学園 前橋国際大学講師 **藤枝 豊**

高等学校英語カリキュラムの一つに,「ライティング(Writing)」がある。文部省『高等学校外国語学習指導要領解説 外国語編 英語編』(1999年)によると，Writing指導の目標は「情報や考えなどを場面や目的に応じて英語で書く能力を伸ばす」ことや「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」(p.66)ことと示してある。上記からわかるように,Writingは重要なコミュニケーション技術の一つと考えられ，情報を明確に伝達し,相手に理解させることを目標にしている。しかしながら，昨今の英語指導法からうかがえるのは,「会話能力育成」，主にSpeaking能力育成が過度に一人歩きし,「話す・聞く」力を習得すれば会話能力と情報伝達能力があると評価されがちなことである。従ってWritingが，文法指導の延長や和文英訳といった古典的学習指導科目として判断されることに危惧を感じる。私は，昨今の指導法である会話能力指導方法(Communicative Method)に賛成な立場である。しかし，英会話能力育成だけが会話能力ではなく,「書く」能力も重要な会話・伝達能力であると主張したい。Writingは簡単に自分の考えや気持ちを表現するのではなく，読者(Audience)を考慮し,情報を充分にかつ明確に伝える伝達手段である。

授業の実践例

前述したように，Writing授業は，英文法・語法知識を習得する指導が主流になっている。文法・語法指導だけに着目すべきでなく，習得したそれらの能力が応用できるタスクを実施する必要がある。簡単なトピックを設定し，それに応じた内容を書く実践をする。トピック例として，自己紹介,自分の趣味，家族や友だちといった生徒に身近な題材を選択する方が望ましい。英文を書き，文章をつなぎ合わせて一つのパラグラフ(段落)を完成することを目標にする。また，レベルやクラス編成に応じて，Prewriting活動(brainstorming, clustering, outlining 等)を行い，パラグラフを完成するまでの過程にさらに重点を置くと効果があると思われる。

最後に完成した作品を生徒どうしで評価し合う方法(Peer Response)を取る。お互いに良い点と改善点を指摘することで，作者自身が内省的に復習でき，より読者を意識したWritingを達成できる。また，学習仲間の作品を評価することや助言を交換しあう社会的相互作用から，学習者は表現方法や語彙などを学ぶ効果的な学習の足場(Scaffolding)を提供され，語学習得を促進できる機会にもなる。

Writing授業の教育的示唆

高校英語のWritingは,文法指導や数行の和文英訳の実践を中心としていることが多い。今後のWriting授業の展望は，時間を使い，英作文の過程を通じ,生徒のWriting能力を認識できる授業の展開をすること，幅広いトピックを利用した英作文作成などの応用が必要である。様々なトピックを使って英作文を指導することは，生徒がこれまで学習した文法・語法や語彙力を発揮できることに加え，英語で長文を書く能力育成に導く利点がある。生徒は，数行の和文を英語に訳す訓練経験だけが多く，まとまった文章を書く実践方法をほとんど学習できない。だからまとまった文章を書くために，学習者が取り組みやすく，なじみのある題材(自分の生い立ち，家族，友だち，学校生活等）を通じ，訓練することが重要である。

Writingは正確な語法や語彙を使って文章を書くことが重要である。今後はさらに単純な文法・語法能力を高める訓練を超えて，パラグラフを書き，１つの作品を英語で書くという実践が要求される。教員は時間と労力を要するであろう。生徒は時間を費やし,書く過程からWriting能力を育成し，語学学習の利点を発見できる授業を提供されるべきである。また最後に，私はこの実践方法は高校だけに限らず，高等教育現場にも言えることだと主張したい。

英語は魔法の杖？

東京都 知事本局 **櫻井 雄一**

実社会における英語の役割については，いろいろな意見があります。中でも多く耳にするのは,「これからはどんな仕事でも，英語は不可欠」または，その延長上で「英語ができなければ社会の重要なポストにつけない」ということではないでしょうか。

私も学生時代，英語の先生や各メディアを通じて繰り返し耳にし，そのように考えていました。しかし，実社会に出て実感したのは，必ずしもそうではないということです。

私が以前勤務した企業(一応一部上場)や，現在勤務する官庁でも，TOEICで700点以上の人ですら，数える程です。また，多くの社員が英語ができないために日々不自由な思いを強いられている,ということもありません。

逆に言えば，商社や外資系などを除き，多くの企業等では，英語を使うのは一部の部署に留まり,他の大部分の社員は英語ができなくても，さほど困ることはないということです。

事実，契約書など重要な内容の英語や，英語以外の言語は，通訳・翻訳業者に委託しています。また，企業にとっても，その方が社員が行うより時間も費用もはるかに節約できます。

このため，少し英語が得意だからといって，これで充分とばかりに社会に出ると，足をすくわれるかもしれません。

英語学習は無用，と述べているのではなく，実社会において英語とは，それだけができても，皆がひれ伏す黄門様の印籠でもなければ，たちまち願いを叶えてくれる魔法の杖でもなく，パソコン等と同様，あくまで仕事のための道具であるということを，まず認識してほしいと思います。

ビジネスの世界では(特に高いポストになるほど)，英語力よりも，業務に直結する知識(経理・法務・貿易実務など),または人間関係維持能力や問題把握力，決断力といった資質の方が，はるかに求められます。

最近，一部の企業，それもかなりの大手でも，TOEICスコアが低ければ昇進できない，という制度を始めていますが，これこそ英語の持つ役割の誤った認識例だと思います。

せっかく実務に精通し，コスト感覚も備わっている人材が，英語が苦手というだけで適した立場につけない，というのはその人だけではなく，組織にとっても資源の浪費です。特に営利企業であれば，英語力よりも，簿記検定や宅建などの資格を昇進の要件にした方が，よほど有益だと思います。

逆に，英語はできても仕事の能力が低ければ,道具の手入れのみ熱心に行い，肝心の料理の腕を磨き忘れたコックのようなもので，社内では翻訳要員の「便利な英語屋さん」に留まったままでしょう。

同様に，「自分は英語が得意だから外資系にでも就職しよう」というのも，やや短絡的かと思います。日本の企業で「私は日本語が得意です」と胸を張って言うようなものですから。「では，その英語を使って何ができるのか」ということが問われます。

英語を使って実社会で活躍したい，と思うのであれば，英語はあくまで道具に過ぎない，という事実をまず見据え，その上で業務の能力を向上させていけば，英語を，可能性を切り開く素晴らしい道具に変えることもできる，ということを，特にこれから社会に出る人には心に留めて学習してほしいと思います。

英語教育時評

小学校英語活動の指導者に求められる資質・能力

納谷(1973)は,“I am teaching my pupils English.”の中の4つの要素を,「私の教える児童の実態の把握」「私の児童に相応しい指導」「私の児童に相応しい教材」「私自身の研修」と言い換え，教師の能力や資質の必要条件は，自分の指導する学習者に照準を合わせて対応できる力量であると説いている。小学校に英語教育が導入される機運が醸し出されている現在，児童期という独特の認知的・情意的発達段階に対応して「指導の質」を工夫すべき指導者にはどのような能力・資質が重要なのか，ニーズ分析をする必要がある。

松川(2004)は,「子どもの実態をよく理解した人であることが最も重要である」と言っている。これは納谷の挙げた第一条件であるが，具体的にどのような行動特性になって現れるのであろうか。松香(1990)は，やや具体的に次のように概括し，このような条件にもかかわらず，児童英語をやってみようとする人が望ましいと結んでいる。①子どもの好きな人，②明るく表情が豊かな人，③自分の知らないことにチャレンジする人，④正しい発音ができる人，⑤ゲームや歌をたくさん知っている人，⑥英語だけの授業ができる人，⑦工夫しようとする人，⑧報われることを期待しない人。

②④⑤⑥はどのように実行されるか想像に難くないが，①③⑦⑧はどうであろうか。例えば①では，子ども一人ひとりに関心を示し，大切に思っているところから,「子どもの行動や反応に対する感受性を常に研ぎ澄ましておき」(中本，2003)，子どもの予期せぬ反応に機敏に応じる，子どもを励まし元気づける，ほめる，子どもに自分から声をかけ話しかける，子どもの誤りを正すときには目を見ながら行う，子どもの日々の活動のメモを取る，などの行動が顕著に見られるであろう。

確認のため，日本の児童英語教育において優れた教師の行動特性と考えられる34項目を設定して135名の現場の方にアンケートを実施し，t検定を行った。すべてに有意差があったが，特に，以下の行動特性では非常に顕著であった。①教師の表情が豊かで活気に満ちている，②指導内容を児童の身近なことに関連づけて取り扱う,③ほめる(ほえみ，相づちも含めて)，④励まし力づける，⑤教室で話すとき相互のやりとりは英語で行う，⑥授業の始めに英語で軽い質問や前時の復習をする，⑦子どもの予期せぬ反応に機敏に応じる，⑧子どもの気持ちを汲み，考え(意見)を活かす，⑨気まぐれでなく公平である，⑩動作が活発で手を使ったジェスチャーが多い，⑪リズム感があり，チャンツによる指導がうまい，⑫質問，応答，説明，指示，賞賛，励ましなど日本語よりも英語で行う，⑬英語がうまい，⑭辛抱強い，⑮冗談，ユーモアに富む，⑯発音がきれい，など。

これらには，英語学力を育成するという目的達成にとって，直接的機能を持つもの，間接的機能を持つもの，有効な指導技術に関するものがあるが，総じて，松香の挙げている①②⑥と符合している能力・資質の具現化が，優れた教師か否かの差として特に重視されていることが分かる。

文部科学省は「英語活動」では言語学習を主な目的にしないと規定している。ことばによる教育活動において言語能力の育成が付随的であることにいかなる意義や論理的根拠があるのか，その論議が尽くされていない現状を看過してよいとは思わない。冒頭に引用した英語表現が，“I'm teaching English to my pupils.”にすり替えられてはならない。百歩譲って，「遊びを楽しむ」とか「異文化に慣れ親しむ」というとき，どのような子どもを育てることが，指導者に期待されているのであろうか。端的に言えば，共生のための基本的姿勢や国際感覚が如実に現れている言語機能(感謝，依頼，思いやり，提案，意見・感情＋その根拠)を子どもに体得させていくために，日々の実践の中でこれらの範を示すことに他ならない。この認識はことばによる教育の核として，小・中・高・大と一貫すべきことでもある。

(兵庫教育大学名誉教授　青木 昭六)

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起，実践報告，研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが，本誌は今後，5月，9月(第54回中村英語教育賞入選論文発表)，2007年1月にそれぞれ発行の予定ですので，原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

① 22字詰×72行以内(本文分量)
② 二重投稿はご遠慮ください。
③ 採用分には薄謝を進呈いたします。